

4 月度土曜例会（2017 年 4 月 15 日）

Some interesting cross-cultural problems

Japanese business people face

日本人が直面する異文化交流での問題点

デイヴィッド タリー

Mr. David Turri(UK)

この日のゲストスピーカーは、約40年日本に住み、大阪など多くの企業に働く人や学生を対象に human resource の仕事をしてきた英国人の David Turri さん。ビジネス関係者だけでなく一般の人も含め、日本人が外国人、特に欧米人などと交流するにあたって不得手とする点を取り上げ、その改善策を語ってくれました。タイトルは「Some interesting cross-cultural problems Japanese business people face」。固そうな印象を受けますがワークショップ的な実習やゲームを交えた楽しいレクチャーでした。以下は要約です。



タリーさん=写真左=はイギリス人でノンフィクション作家。長年、人材育成会社で社会人や学生らの英語教育に携わってきました。ニュージーランド・カンタベリー大学卒。日本人女性と結婚、大阪在住。

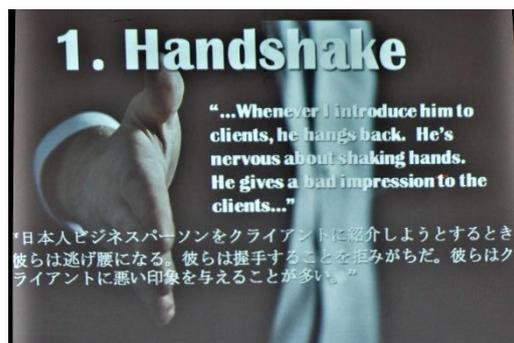
タリーさんは、日本人が英語でコミュニケーションする際に苦手とする5つの項目を挙げて説明しました。

1、Handshake

日本人は初対面で、まず名刺交換を大切にするが、米国人の場合はこれを重視しない。米国最大のビジネス誌「Fortune 500」のCEOがかつて、「同じ資質を持った2人の志願者のうち、どちらを選ぶかとすれば、私は良い握手ができるほうを選ぶ」と語ったエピソードを紹介。

握手はまず、手の平を服などで拭い、力強く相手の手を握り、2度上下に動かす。また、別れ際にもう一度、握手することが普通。

しかし、日本人の中には外国からの客が来ると後ずさりし、相手の指の部分だけしか握

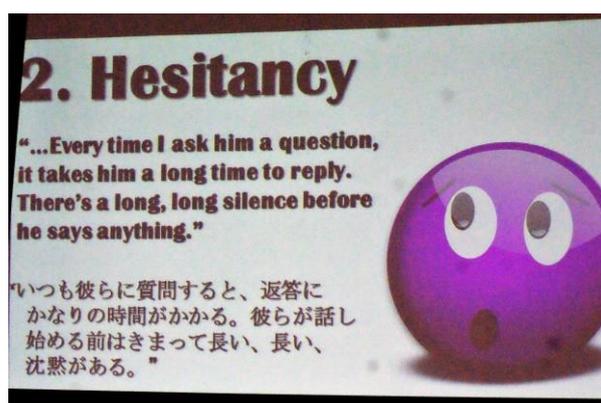


らない人がいる。そのあと、英語でする挨拶のことが気になって緊張し、手を放すタイミングに迷う人や、汗で手の平が濡れる人もいる。

タリーさんは「握手は action であり、dance のようなもの。タイミングが大切」と話し、「大きなプレッシャーがかかっているからだろうが、弱々しい握手ではクライアントに悪い印象を与えかねません」と注意を促しました。

なお、女性の握手は一般的にソフトだったが、最近は活躍の場が増え、自然に力強くなりつつあるという。

Hesitancy



タリーさんは国際的な人材育成の仕事をしていて、人にインタビューすることが多いが、日本の学生は面接を受ける場合に hesitant な姿が見られる。小さい声、自信と落ち着きのない目は不信感と不快感を与えてしまう。要は、相手の眼を見て、力強く自然な握手をすること。反応が遅い、沈黙が長いのも良くない。

日本の英語教育は試験に合格すること、書くこと、読むことを重視してきた。学生たちには「ミスをするると減点につながる」という意識がしみ込んでいて間違いを恐れる。英語脳ができていないから自信が持てない。

「中学からかなり長い年月、英語を学んできて、多くの英単語を知っているはずの大卒者でも話せないのは日本の英語教育のせいでしょう。会話で文法などのミスを犯すことは自分を improve すること。ブロークンでもいいのです」と強調しました。

ここで、タリーさんは参加者を数人ずつのグループに分け、英語の言葉についてグループの一人がヒントを与え、他のメンバーがその言葉を引き出すゲームを実施。スピーディーにやるので文法通りの英文を頭の中で考えるひまはなく、反射的に英語を発するようにさせる訓練。間違い



を恐れず、自分の気持ちを伝えさせることが狙いだ。

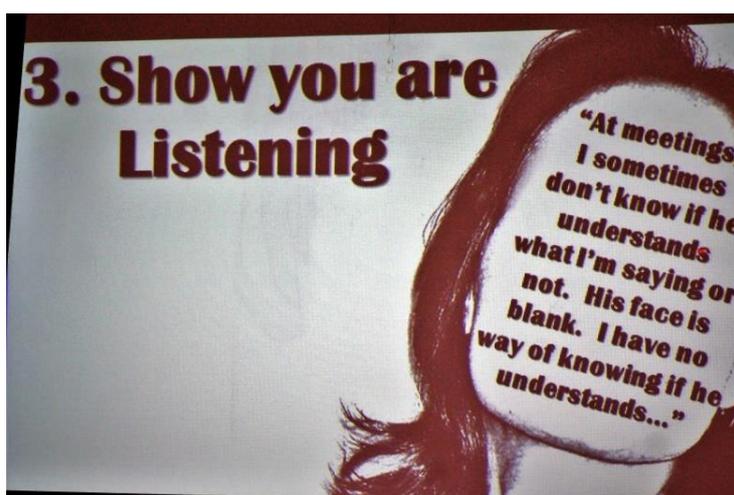
参加者から「やってみたら何とかなるものだ、と実感した」という声がありました。

3、 Show you are listening

ドイツなど海外にいる日本人ビジネスマンの英語のレベルはそれほど高くない。そこで、ミーティングなどで発言したがる傾向がある。表情もあまり出さない。石の地蔵のように無表情な stony face や blank face では、inscrutable(何を考えているのかわからない、ミステリアス)な印象を与える。聞いているのか、理解しているのかわからない態度では相手に不安感を与える。

そこで会話では常に feed back (聞いているよ、と反応する) が大切とし

- Nodding(うなずき)
- Making noise(アーハー、イエスなどと相槌を打つ)
- Echoing (相手の言ったことを繰り返す)、
- Frowning (わからないときなどに眉をひそめる) を示すことが必要と話しました。



ここでタリーさんは参加した IIN メンバーの一人に自己紹介することを依頼。

「My name is OO.」「I am twenty years old」「I love studying English」「And I am enjoying your lecture」などと話すのに合わせ、

「your name is OO」「OK」「twenty? You look eighteen」「aha」「Oh, thank you」などと応じ、理想的なコミュニケーションの例を示しました。

これに関連してタリーさんは仕事での体験として「OK, OK」、「Yes, Yes」ばかりで応じ、相手を不安にさせる人、精力的すぎて、こちらの言ったことを確認のためか、すべてオウム返しに繰り返すやりすぎの例を紹介。また、数年前には日本にやってきた友人と神戸・三宮で飲んでいたら、突然、「Are you listening?」と聞かれたことも。「私も長年、日本に住んでいると、サイレントな日本の風潮に染まっていたようだ」と笑っていました。

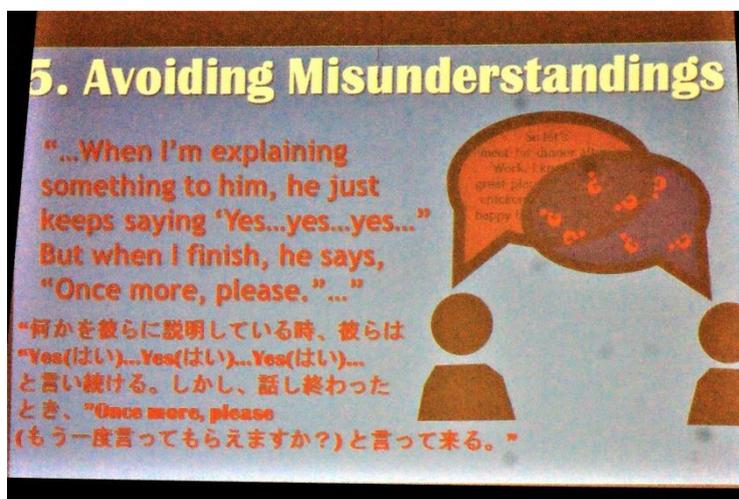
4、 Keeping a conversation going

日本人と簡単な世間話 (チャット) をしても続かないことが多い。質問して

も短い返事が返ってくるだけ。そこで、会話ではもっと自分からも情報を発信し、ボールを投げ返すことが大切、と訴え、タリーさんの指示で、例会参加者たちが両隣に座るメンバーたちと握手から始まる良いコミュニケーションの練習を行いました。

5、Avoiding misunderstandings

日本である人に何かを説明していた時、相手は「Yes」、「Yes」、「Yes」だけを繰り返す。ハナシが通じていると思っていると、最後に「Once more please」と言われたことがあるという。遠慮深い日本人は会話中、話をさえぎることをためらいがちだ



が、わからないときは誤解を避けるため、聞き返すことも必要で、そんな時は「Sorry?」と言う。Magic word だ。

この後、タリーさんは早口で電話番号を言って、会員たちに聞き取りの練習を行いました。10桁くらいの番号のため、当然、一度では聞き取れず、「sorry」「sorry」と interrupt の声。また、電話で待ち合わせの日、時間、場所などを伝えることを聞き取る練習も行い、言葉の繰り返し (echo) の大切さを学びました。